

Title	犬と穀物：東亞における穀物起源伝承に関する一研究
Sub Title	On the tradition of a dog which brought cereals to mankind
Author	伊藤, 清司(Itoh, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.21(183)- 41(203)
JaLC DOI	
Abstract	The tradition of a dog which brought cereals to mankind in old times is spread among agricultural peoples of South China-Chinese, Miao, Yao, Thai, Tibetan. We can group these traditions into two types as follows. 1) Unhulled rice was brought to mankind by the tail of a dog swimming through the water. 2) Cereals except rice-barley corn, etc. and melon was brought by a dog (lacks in the factors of "tail" and "through the water" in this type). We find generally type 1 among the agricultural area of wet rice and type 2 in that of another cereals. It is probable that type 2 is a variation of type 1. And it seems that the tradition of "Inoko (亥の子)" -deals with a dog and barley-in Japanese Archipelago is a versionn of type 2.
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0025">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0025</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 犬と穀物

—東亜における穀物起源伝承に関する一研究—

伊藤清司

「亥の子」は旧暦十月の亥の日を中心とした日本農村の、収穫後の行事である。西日本的一部では、この「亥の子」の神は田の神同様に、春来て秋に去る農神と信じられ、「亥の子日」に祭られる田の神を亥神様とよんでいる土地もある。<sup>(1)</sup>

ところで、これら「亥の子」・「亥神」の「い（え）のこ」という用語の由来は、一年の各月を十二支に配当するとき、十月の月に当るところにあつたとされるけれども、この配分法では、歳のはじめの月を子からではなくて、第三の寅から数えることになる。平安朝以来の文献に現われる「亥の子」行事をみても頷かれることだが、この習俗は漢文化の影響をうけて中央で行なわれたものが、民間にも行なわれるようになつた側面をもち、これが地方の農耕儀礼と結合し、かなり錯綜した複雑な内容の民俗なのである。<sup>(2)</sup>従つて「亥の子」の称呼の由来についてみても、十月が亥の月に当る故、という単純な解答で尽せたとはとうてい考えられないが、さらに「亥の子」と呼ばれているその対象もまた不思議の一つで、「亥の子」とは果して何を指称しているのかということも決して自明とは思わない。十二支の中には、龍（辰）の如き仮

空の靈獸も存するから、十二支の亥を無理にあれこれの存在に比定する必要はないかも知れないが、実在の動物に亥と呼ばれるものがおるのである。だが、これをはじめから野豚、猪豕の類ときめてしまふのは果して妥当であろうか。なるほど、「古語拾遺」には、大歳神に白猪を供獻することが見えるし、これらの動物が「ハレ」の食べ物とされる例は、南島などに少なくない。また、福岡県行橋地方の一部では「亥の子」に猪の像を大釜の上に安置して祭るといわれ<sup>(3)</sup>、香川県三豊郡の佐柳・志々島地方では、「亥の子日」の由来を猪にかけて語る伝承がある。すなわち、志々島では、

昔、爺と婆が耕作に難儀し、手助けしたのに娘をやると話している。猪がやつてきて手伝い、約束通り、娘を嫁にする。爺婆は嫁入道具だといって、藁を背負わせ、ついてゆく娘に耳打ちする。山で娘は火打石で藁に火をつけ、逃げ帰る。猪は焼け死ぬ。その時から、「亥の子」の日に、猪の追善だといって、「亥の日よさ、餅搗かぬ者は、鬼もけ、子もけ云々」というようになつた。

と伝えられている<sup>(4)</sup>。

しかし、行橋の猪像についてもそういうわれているが<sup>(5)</sup>、このいわゆる「異類贊入型」伝承は、多分に「亥の子」の文字にひかれて生まれたヴァリエーションであるようにも思われる。

同じ「亥の子日」の由来譚だが、これらとは違い、穀物将来にかけて語るものがある。丹波山地の南部地方——京都府南桑田郡千歳村や兵庫県多紀郡日置村では、「亥の子日」は倉稻魂の神が高天原から稻種をはじめて持つて来られ、その実りを刈られた日であると伝えているが<sup>(6)</sup>、これにやゝ似た伝承で、かつて大藤時彦氏も引用して論じられた報告だが、兵庫県氷川郡鴨庄村には、犬の登場するつぎのような伝説がある。

昔、弘法大師が巡回中のこと、たまく麦がおいてあつたので、それを一つかみ盗まれた。すると、犬が吠えたてたの

で、飼い主はその犬を殺してしまつた。大師は無実の罪を蒙つて死んだ犬を憐れみ、毎年、麦蒔き頃の戌の日、犬を祀られた。それが「亥の子」のはじめである。昔は「亥の子」は戌の日にしたという。

山口県大津郡阿川村向津具にも、これと同系の伝承があつた。

昔、弘法大師が唐から麦を三粒盗み、杖の下に匿してもち帰るときに、シナの犬がこれを咎めて吠えたてたので、却つて、主人のために殺された。麦を収穫した際、カマドの上の壁に初穂をかけて、犬の靈を弔う風俗は、このときの故事に由来する<sup>(7)</sup>。

また、徳島県三好郡祖谷山中には、麦の初穂を三本、畠の崖や家の軒に吊す風俗があり、これを「犬の穂掛け」とよんでいるといわれる<sup>(8)</sup>。同じ徳島の美馬郡椿町地方に「亥の子」に関する、瓢箪という名の犬が人々を悩ます怪物を噛み殺す「猿神退治譚」を伝え、この行事の由来は、この怪物退治をした日が、十月の亥の日であつたという<sup>(9)</sup>。これはあるいは、あとで論じるように、その読みのあいまいさから、「亥の子」を「いぬのこ」と解し、その音につられて生まれた複合伝承と考えられぬこともないが、とにかく、これらの限られた資料からでも、わが国では「犬が何かそれ（穀神）に近い役割をかつては持つていたのではないか」、「亥の子が犬のお祭り」ではないかという想定も生まれてくる。

しかし、これらの資料から、犬が穀神として祭られるに至つた積極的理由が見いだせるとはいえない。犬は一番古い家畜であり、人間の最古の伴侶であつたことは、考古学がこれを証明しつゝある。そしてこれと人類との接触が、食糧としてのそれのほかに、この動物のもつ特性に基づく番犬・猟犬としての効用においてであつたことも、この学問などが推論している。さきの兵庫・山口の民間伝承は、穀物盗みのモチーフで、犬はどちらかといえば、吠えて守るこの家畜の性に力点がおかれしており、これら説話の中では、必ずしも不可欠の存在でないようにもみえる。それでも拘らず、犬に穀神的性

格を認めようとした大藤氏らの見解は、示唆的であると思う。説話の展開やその中での役柄の如何もさることながら、問題はこれらの伝承が「亥の子」になぜ犬をまつるかを語り、犬が「亥の子」になぜ関係をもつかを説明しているところにあるとみられるからである。重視すべきはこの点であろう。「亥の子」の発音が「いぬのこ」と訛り、そして誤られただけで、これだけの説話や習俗が生まれたようには考え難いのである。たゞし、犬と農耕の関係をとくこれら資料の中で、その有用植物がいづれも麦ばかりであるのは、どういう訳であろうか。「亥の子」の行われる旧十月といえば、麦の収穫が問題にされる季節ではない。犬の関係する「亥の子」行事、あるいは犬が関係して将来される穀物の起源説話の中に、麦以外の農作物、就中、稻米が登場するものがないであろうか。柳田翁は「自分らの聴き知る限りでは、隠してもつきた穀物は稻ではなく、おくれて斯邦に流傳した大麦であつた。たしかに稻となつて居る実例もあるといふが……」とのべているが、その実例とは、いかなる地方の伝承であろうか。それは奄美にあるという民間説話のことなのであろうか。

## —

ところで、犬の登場する伝承といえば、わが国では、「花咲爺」の昔話が有名だが、これは畑の中から宝の出る発端から、枯木に花のフェナーヌまでの事件の展開は、同じ犬の手柄ばなしといつても、早太郎流の怪物を退治し、獲物を捕える物語ではなくて、どちらかといえば、土のにおいの濃い民間伝承である。しかも、この犬の出自を問えば、川上から流れ下つた小箱の中から出てきたというような、いわゆる小犬竜宮型のはなしもあつて、先学のいうように、水の神と犬は古くから、特別の関係があつた。<sup>(14)</sup> また、この犬は死んでは植物に化して奇瑞を示すのである。しかし、他の民間伝承と同様に、「花咲爺」にも、とくに犬が穀神であること、あるいは農耕神的性格をもつことを直接に示してくれるものは見当らない。

ところが、「兄弟分家」・「枯樹開花」などの名で、この花咲爺型説話が中国大陸、ことに江南・華南の各地に伝流している。そしてわが国の「花咲爺」は、これと比較することなしに論じられぬほどの細部の一一致の多い犬の奇瑞譚である。<sup>(15)</sup>たゞし、日中両者のストーリーの上で相異点は、大陸のこの民間説話の犬が、いかにして善良なる人のもとに飼い養われるに到つたかの経緯を、やゝくわしく説くものの多いことであり、それが亡父の財産分配に当つて、大抵は愚弟が狡猾なる兄夫婦のいうまゝ、なすまゝに手に入れた遺産が、わずかな田土と一匹の小犬であるという序説となつてゐる。

それが「兄弟分家」の名で呼ばれる所以であるが、その犬がまず飼い主のために垂れる最初の奇蹟が、日本の「花咲爺」には全く欠けておる要素となつていて、この有無が日中両説話の目につく相異となつてゐる。漢族のみならず雲南奥地の侏儒族・彝族などでもそうであるが、犬は、瘦せた田地に悄然とたゞむ飼い主のために、重い犁をひいて、耕牛挽馬に代る働きをするのみならず、却つて、それらの畜獸もなし得ぬ非凡の力を示し、みごとな収穫をあげて、貪欲な兄をうらやましがらせるのである。狗犬を挽曳に用いる習俗は寒冷な北の地方にはよくみられるが、果して犬が犁を曳きうるものか、実際に犬による犁耕という農耕の風が存するものかどうか、そして更に、この説話の中での犁耕云々の部分は多分後世の附加であると考えられるが、なぜ大陸のこれらの人譚にこれほど犬耕の要素が多いのに、日本の花咲爺譚には発見し得ないのか、そして、この事実はこの花咲爺型説話が大陸よりわが列島へ伝流された時期などに、一つの示唆を与えるのではないいかなどというきまぐな問題は、犬と農耕を論じる上に必しも無関係なことではない筈だが、こゝでは不問にふすることにして、とにかく、靈妙なる犬の示す最初の奇瑞が、中国の民譚では田土を耕作して、豊穣をもたらすということがあつた。この型の説話が中国で「狗耕田」・「耕田狗」ともよびならされているのはまさしくこの点にある。つぎの「狗尾草」も、そういう発端の説話である。

「大林」<sup>ダリス</sup>と「和五」<sup>ホウゴウ</sup>の二人の兄弟があつた。兄はさる慧しこいが、弟の「和五」は愚鈍な男である。父の死後、めぼしい遺産を独占した兄夫婦は、「和五」に破れ家と僅かばかりの瘦せ地と、それに一匹の犬を分ち与えて分家させた。その犬がある日、不意に口をきく「畠を耕させて呉れ」という。「和五」は早速、犬に勧をつけて曳かせてみると、牛よりも立派にやつてのける。そして刈り入れどきには、「和五」の畠からは、兄の何倍もの麦が穫れた。

「大林」はこれを不思議に思い、翌年は、弟の犬を借りて耕作するが、犬は「大林」の畠では、一步も動こうとしない。腹を立てた「大林」は、たちまち、その犬を撲り殺してしまつた……。

ところが、「狗耕田型」ではじまつたこの説話の後段は、犬の奇瑞譚ではなくつて、「狗尾草」の説明伝承と變つてお

り、つぎのような結末となる。

……「大林」はその犬を地下に埋めてしまつたが、あわてて埋めたため、犬の尻尾は地面に出たまゝであつた。「大林」は弟の家にやつてきて、

「困つたことになつた。お前の犬が土の中に、もぐり込んでしまつたぞ！」

という。「和五」は兄について行つてみると、成程、犬の尻尾だけが地上に出ていて、ゆり動いている。ところが、それはもう青々とした草に変つていた。<sup>(16)</sup>

これがいわゆる狗尾草とよばれる植物の由来であるといふ。

禾本科一年草のこの草は、わが国では俗に「ねこじやらし」と呼ばれる草で、栗状の穂の形が犬の尾に似る。「本草綱目」にも「形、狗尾に象どる。故に俗に狗尾と名づく」という。この草をわが国では一名「いのころ（そのころ）ぐさ」または「いのこ（えのこ）ぐさ」とよぶ。そしてこの称呼は古く、すでに「倭名抄」には、狗尾草に「恵能古久佐」の訓

が施されている。しかしながら、この訓読は狗という漢字にいきなされた結果のそれなのか、あるいは日本でも野草が犬の尾に似ているとされての、古くから行なわれていた称呼であるのか。そのいずれにしても、この草を「いのころ（えのころ）ぐさ」・「いのこ（えのこ）ぐさ」・「いぬのこ（えぬのこ）ぐさ」などと読み、あるいは称して、なぜ「いぬの尾ぐさ」とは訓じ、あるいは呼ばなかつたのであるか。「牧野日本植物図鑑」には

「ゑのころ草」ハ狗の子ノ意、狗の子ハ子犬ヲ云フ、即チ其穗ヲ子犬ノ尾ニ擬セシナリ云々。<sup>(17)</sup>

という。犬の尾に似る故に、「いぬのおぐさ」と称すべきで、「いのころぐさ」・「いのこぐさ」と呼ぶのは誤りと主張するのは、確かに理屈に過ぎて、却つて誤謬を冒かことになるかもしれない。たゞし、「いのこ（えのこ）ぐさ」の称呼が「狗尾草」の倭訓として用いられたものならば、さきにふれた「亥の子」（い（え）のこ）は、山猪野豚の類ではなくて、犬を指称したものではなかつたかという推測も起りうるのである。また、仮りに、いのこ（えのこ）ぐさの称呼が、中国の狗尾草という文字と類同するのは、偶然の吻合であつて、その形状が動物の尾の様に似る故に、わが国で使用された呼び名であるものならば、猪の類の尾は、とくに、この草を連想させるものとは考えられないから、いのこ（えのこ）草のいのこ（えのこ）は、「牧野図鑑」もいうように、犬の子をいつてるのであつて、これと同じ音の「亥の子」<sup>(18)</sup>は必ずしも猪豚を意味したと考える必要はない訳になろう。こゝろみに古文献をみても、「松屋叢考、一」に「イヌ、ゑのこ、定家卿鷺三百首、冬部に はし磨の 木ゑとる雉の おちはまり 鼻つけかぬる 異のこ犬かな云々、按に、ゑのこはゑぬのこの略語なり」とあり、「平家物語十二、六代事」に「のぞいて見れば、白のゑのこの、庭へ走り出でたるをとらんとて云々」などの例もあり、犬はゑ（え）のこと訓じられているのである。すなわち、以上によつて、われくへは「亥の子」行事の「亥の子」は、犬を意味していたのではないかということを、その訓読・呼称の観点からも想定するのである。

三

豊かに実つた穀物を、犬以外の動物の尾に譬えて、よろこぶ表現はもちろん少なくはないからう。たとえば、廣西の苗族の長編敍事詩「哈梅」では、

九月収禾把、剪得九千九百把、穀穗長長象馬尾、穀粒粗粗象蛤貝。<sup>(19)</sup>

と、あるいは、雲南省の彝族の長編史詩「梅葛」に、

穀子長得像馬尾、大麻長得像竹林。<sup>(20)</sup>

と、馬の尾に比喩しているものもあるが、しかし、犬の尾と、馬その他の動物などのそれらとの比喩とは、こゝでは同一に扱うべきではないように思われる。<sup>(21)</sup>

狼・野干のたぐいも興奮などの折、一時的にその尾をあげることははあるが、常時、尾を卷いたりあげたりするのは、飼育されたある種の犬のみが示す現象であつて、野生の犬科動物にも見ることのできない現象であるといわれる。さきの「狗尾草」伝承は、その穂の形が犬の巻き尾・立ち尾を連想させる故の説明説話の形式をとるが、しかし、虞美人草流の視覚的連想や文芸的発想がこうした伝承発生のすべてではないよう思う。くり返すことになるが、「狗尾草」説話はその前段が典型的な「狗耕田型」をなしながら、死せる犬の奇瑞物語あるいは勸善懲惡的な展開をせず、後半は埋められた犬の尾が莠の草に化したという植物由来譚に終つており、説話の展開上、その前後の結合はやゝ不自然と思われる節がある。しかしながら、この接合を敢えて可能ならしめた背景が存したに違ひない。すなわちそれは、まず犬死して植物と化し、人に富裕をもたらす伝承の流布していたことであり、そして第二に、食用植物を人類にもたらしたのが、他ならぬ犬であったという伝承があり、それが犬の尾に関係づけられて語られているものがあつたからに相異ない。

「民俗週刊」第八四期に、犬が人類に稻をもたらしたという、概略つぎのような伝承が報告されている。

天地創造のころ、神々の住むところと地上世界とは、大海によつてへだてられていた。神々は荒涼たる地上に、まず草木を生やし、女媧は土をこねて人間を造り、鳥獸蟲魚をこれに配して、地上を活氣づけた。しかるに、神々の期待に反して、人類と禽獸とは互いに相争い、地上は乱れた。そこで玉皇をはじめ盤古・神農らの神々は相談し、やがて神農の発議で、人類に食料として天界の稻を与えることになつた。そして更に、女媧の提案により、人類の伴侶として、牛・馬・犬・猫を授けることにきまり、彼等のいずれかに稻を携えさせて、地上に送ることになつた。しかし、牛も馬も、そしてまた泳ぎのできない猫も、この重責に堪えないと固辞し、結局、犬がその使命を帯びることになる。出發に先立つて、犬は稻穀の上にころげまわり、全身、黃金色の穀に覆われる。こうして犬は大海を泳ぎ進んだが、山のような波浪にもまれて、浮き沈みしてゆく間に、体の穀は洗われ落ちてしまい、地上世界に泳ぎ着いたときには、その尻尾のさきのホンの少しばかりが残つてゐるにすぎなかつた。神々の世界の稻は根もとから穗先まで、一杯に実がついていたのだが、このために、この尾先の穀を蒔いて実つた地上の稻は、犬の尻尾の如く、茎の先端に実るにすぎないのである。それはとにかく、犬のお蔭で、人類は稻米を食糧とすることができるようになつたのである云々。<sup>(23)</sup>

報告者はこの説話の採集地点を明示しておらず、また登場する神々の名に玉皇以下の名のみられる点などから、この資料的価値は検討の余地はあるうけれども、視覚的連想が創り出した単純な説明伝承とは考えられない。稻を人類に将来したのは犬であるという信仰が、この説話の母胎であつたであらうこととは、つぎの四川地方の同じような伝承が示唆する。

採集地は同省揚子江四大支流の一つ涪江中流域にある遂寧県東禅鄉。

世界の大洪水がひくと、人々は山の頂からところどころ乾き始めた平地へ移つてきた。ところが、地面がやつと水面から

現われたばかりの時で、従来、殺して食べていた生き物が大方溺死していたので、人々は食べ物が足らず慌てた。しかし、幸いなことに、生べ物の尽きないうちに、もう新しいことが発見された。まだ水の下になつてゐるところから、犬が一匹、泳いでくるのが見える。その上、犬の尻尾には黄色くてまるい小さなつぶくの糲がたくさん着いていた。人々は早速、それを乾きはじめた泥地に蒔いた。やがて芽がでて稻になり、米が実り、人々はそれを採つて食べた。爾来人々は犬の手柄を忘れず、新しい米を食べる時には、まず犬にやつてから食べるようになつた。

それで、われくは今でも、毎年、新しくできたお米を食べる前に、必ず犬に先にやることにしてゐるのである。<sup>(25)</sup>

犬が穀物を将来する伝承は、すでにエバーハルト氏が指摘しているように、湖南・廣東・四川などに流布している。<sup>(26)</sup>「寧遠歲時記」によれば、湖南には五穀が犬の尾によつて播種されたと伝えられており、そのため六月の黃道辛の日に<sup>(27)</sup>犬に新穀を供えるといふ。<sup>(28)</sup>また、廣東伝流の民譚では、稻の穂が水田中に高くそびえて、犬の尾のように見えるのはそのためであるといふ。<sup>(29)</sup>このほか、廣西の瑤族の間には、黃金色の穀物の種子が狗によつてもたらされたことを語る神話伝承があり、雲南の傈僳族にも、狗が穀物の種をもたらしたという同じような伝承があつて、そのため彼等の間に正月のはじめ、食べ物をとる前に、必ずこれを狗に与える習俗が行なわれてゐるといふ。<sup>(30)</sup>このように江南や嶺南に限らず、ひろく西南中國の各地に、それも苗族やチベット系諸族をはじめ、タイ系その他の非漢民族の間にも、このような神話が少なくなく、有用植物の起源を犬に関係づけて語り伝えてゐる。<sup>(31)</sup>つぎの貴州・水族および四川・馬爾康地区のチベット族の伝承は犬の穀物将来を述べた民譚の若干例である。

大昔、われくの長竜山一帯は荒れた平原であつた。人々は毎日山へのぼり、野生の果実を探し求めて、その日を送つていた。ある日、孤児の蒿歐其が竹籠をもつて、山へ果実探しに入つたが、一個の果実もみつからず、とうとう、大樹

の下に坐りこんで泣きだしてしまつた。すると、樹上の箐鶲（キジの類）がこれをみて、彼に向つていつた。

「蒿欧其よ！ この苦しい日々をどう過す。お前の手は茨で血が流れても、一つの食べ物も手に入らない。私は東河壠というところに、稻という穀物があると聞いている。しかし、そこまでの道のりは遠くて、私にはゆけぬ。お前が早速そこへ出かけて行つて、その種をとつてきて平原に播けば、みわたす限り、この高原に稻が実り、お前も飢えることなく、私もお蔭で楽しく暮せよう！」

蒿欧其は聞いて山を駆け下り、部落の人々に箐鶲から聞いたことを話した。人々は大喜びをしたが、一体、誰がどうしてその遠い東河壠へ行きつくことができるかを考えると、皆とまどつてしまつた。蒿欧其はその苦難の旅を自分から進んで買つてでて、穀物の種子をとりに出立することになつた。老人たちは彼が帰り道に迷うことを心配して、一匹の黃犬を伴わせた。犬は千里の道を記憶する。犬は蒿欧其を案内することができるのだ。

蒿欧其は小さい黄狗をつれて、朝日の昇る方向に向つて出発した。

長い苦しい旅の末、百九十八日目に、彼らは東河壠の大平原に到着した。太陽は猛烈に照り輝き、平原全体に稻が波打つて実り、金色に輝いていた。彼は稻田の番をしている一老人のところにゆき、稻の種子を求めて遠方から訪ねて來たことを説明した。老人は喜んで自分の家に案内し、彼に新米の飯を御馳走し、とくによく延びた糲粒のたわゝに実つた稻を与えた。彼は感謝し、太陽の没する彼方へ向つて東河壠をあとにした。

三百九十五日経ち、眼の前に長竜山が近づいてきた。突然、蒿欧其は大きい河が行く手をはぐんでいるのを発見した。丁度そのとき、二年前に山の樹上で彼に稻の所在を教えた箐鶲が沢山の仲間をつれて飛んできて、

「蒿欧其！ お前の出かけたあとに、大洪水が起り、大河が出来てしまつた。村の人々はお前のもつてきた稻糲を千秋の思いで待つてゐる。急いでわれくにその稻を渡せ。河を越すのを手伝おう！」

彼は稻を鳥たちに渡すと、彼等はそれを銜えて飛び越えた。そして向う岸へつくと、その糲を啄みはじめたのである。彼は立腹し、急いで茅藤で綱をつくり、犬に手伝わせてやつと河を渡つたが、そのときにはもう、鳥たちは稻糲を喰い尽して飛び去つていた。やむなく、彼は再び稻を求めて東河堀へひき返えしなければならなかつた。犬は尾をあげて先に進んだ。蒿欧其は思わず歎声をあげた。犬の尻尾のさきに糲粒がびつしりついているのである。彼は笑い出し、それを摘みとると、長竜山の麓の泥地のくぼみに蒔いた。糲は芽を出し、苗を水田に移植し、やがて長竜山一帯の高原は黄金色の稻田と化したのである。すると、箐鶴たちは群をなして稻を啄みにやつてきた。蒿欧其と黄狗はこれをひとつ捕えて殺した。それ以来、山の箐鶴たちは田へ稻を啄みに来なくなつた。

幾年か経ち、孤児の蒿欧其とその黄狗は死んだ。人々は稻をもたらした彼らの恩を忘れず、毎年、吃新節の日には、家ごとに山へ行つて網を張り、箐鶴を捕えて、これを料理し、新米の御飯と一緒に田圃へもつていつて穀神——蒿欧其にお供えし、ついで、狗に御飯を与えて、それからはじめて、人間が新穀を食べるのである。この習俗は代々受けつがれ、部落では、今日なお、これを行なつてゐる。但し、今日では箐鶴が少なくなつたので、代りにニワトリを用いてはいるが……<sup>(33)</sup>

この種の説話は同省黔西大水郷一帯に流傳していることであり、こゝにあげたのは、同地田壠寨に住む中老の水族の農民の伝承するものである。説明伝説的要素を含む伝承であるが、単なる民謡ではなく、これが年中行事・信仰・実修と結びついたものである。この中にでてくる「吃新節」とは、毎年七月の卯の日にとり行なわれる新嘗のマツリで、これは土地によつては同月二十三日、または中旬ごろに行なわれるともいう。<sup>(34)</sup> なお、「中華全國風俗志」によれば、粵東瑤は七月十四日をもつて歳首とし、また曲江（廣東北部？）の瑤族は七月望日を狗王を祭る日としているという記述をのせてゐる。瑤族の犬祖神話は有名であり、彼等がまつる狗王とは始祖に關係があろうと想像されるが、これらの断片的な記述

は、おそらく、七月の新穀収穫期を新年とし、穀物をはじめたらした狗に謝して、祭祀を行うことを意味しているのではなかろうか。なおまた、さきの水族の伝承の中で、稻の所在を犬に教え、彼をたぶらかして殺される箸鷄に注意しておせたい。この地方には犬のはかに、鳥が穀物を将来する神話伝承が少くないからである。

水族が水稻耕作を主業とするに対し、四川省西北山地の馬爾康（四土）卓克基地区の住民であるチベット系ジャロン族は、青稞（ハダカオオムギ）を耕作する。彼等の伝承の中で、犬がもたらす穀物はこのオオムギなのである。

大昔のこと、Louju から遠く離れたところに Pula という国があつた。この地方にはかつて穀物というものがなかつた。この国の王子の Achu は山神 Jihwuta のもとに穀物の種子のあることを耳にし、苦心の末、そこへ辿りつく。

しかし Jihwuta は

「オオムギを蛇王が袋にしまつて王座の下に隠してあり、人間に与えることを拒んでいる。」

「見張りがいるが、蛇王はいつも戌の日（四土地方のチベット人が神を祭る日である）に、山上の湖の畔に、竜王を訪ねる。そのときが、穀物を盗む好機だ。」

「万一一、蛇王にみつかると、犬にされてしまうだろう。そのときは、ひとりの女の愛情が再び人間の姿に変えてくれるだろう。」

と教えてくれる。

Achu はうまくオオムギの種子を盗み出しが、蛇王にみつかり、たちまち、黃金色の犬にやれてしまつ。しかし、Achu は Jihwuta の神から授かつた「風の珠」を口に含んだお蔭で、殺されずに逃げ出せた。

犬にやれた Achu は、オオムギの入つた袋を頸から吊し、Joujo 地方までやつてきた。この地方にもまだ穀物がなか

つた。Achu はこゝの土司の三人娘の末の Ngoman にかわいがられる。犬は前足で土を掘り、Ngoman に頸の袋の種子を蒔いてある。やがて、オオムギが穂を出し、実る。果実の熟した秋の月のよい晩、丢包（輪舞と手玉投げを伴なう一種の歌垣）が催され、土司の姉娘の二人は、土地の有力者の息子たちを夫として選んだ。Ngoman は手にした果実を犬に投げ与えて、Achu を夫とめた。彼女は父に罵られ、人々に嘲笑される。

Achu は道すがら、穴を掘り、頸の袋から種子をとり出して蒔きつゝ、Pula へ向い、部落を追われた Ngoman は、そのあとについて行つた。やがて、Pula に到着すると、犬はもとの王子 Achu に変つており、父国王以下の祝福をうけて、二人は結婚した。

かくして、Jouju から Pula の間の数千里にわたつて、オオムギが実り、この地方の人々は誰人もこれでつくつたツアンパを食べられるようになつたのである。なお、オオムギが黄金色をしているのは、黄金色の毛をした犬がもたらしたものである。爾来、人々は犬に感謝をし、毎年、ムギのとり入れ後、その新穀の粉でつくつたツアンパを食べるに先立つて、まず、これを犬に与えるようになつた。そしてこの慣習は今日も絶やさず守り続けている。<sup>(36)</sup>

一名「狗皮王子」の名のあるジャロン族のこの伝承では、穀物が犬の尾によつて将来されず、頸に吊した袋によつて運ばれたのは、犬が水を渡つてくる要素を欠いていることと相対の関係をなすものであろう。しかし、穀物を管理するものが蛇王であり、また、竜王が登場することは、四土地区のチベット族の祭日が戌の日で、この日に蛇王が竜王を訪ねるということなどと共に、示唆的な要素であるとみなければならない。犬の穀物将来譚の中には、ジャロン族の例のように、穀種が尾以外の部分によつて運ばれるものがある。たとえば、雲南省碧羅雪山地区の傈僳族の

大洪水があり、A-hang-p'a ハンパ兄と A-hang-ma という名の妹だけが生きのび、一匹の犬をつれて、巖窟にのがれる。食べ物がないので、兄妹は犬に命じ、天神のもとへ行つて、食糧を乞うように命じる。神は犬の耳に一粒の有用

植物の種子を入れる。犬が二人のいる洞穴に帰り、頭を振ると、種子が地面にこぼれおち、やがて芽が出て、大きい瓜になる云々。<sup>(37)</sup>

といふ、広西の瑤族の伝承では、穀粒が犬の黃金色をした毛の中からこぼれ落ちることになつてゐる。<sup>(38)</sup> 穀物がことさらに犬の尾によつてもたらされるという一条は、必しも本源的な要素とはいえぬかもしれないが、しかしながら、すでに松本信広教授も指摘していることであるが、中国および東南アジアの古伝承において、犬はしばしば竜の名で呼ばれ、あるいは竜の形をとつて現われ、水と浅からざる縁故をもつてゐるのである。<sup>(39)</sup> 紙面の都合もあるので、この点についての詳論は割愛するが、犬が水を渡り、水面に出た立ち尾・巻き尾によつて人類に穀物がもたらされたという伝承は、すでにくり返えした通り、犬の尾が穀物の穂を連想される態の單なる具象的類似から発生したものではないであろうことは、おゝむね明らかにされたと思う。これは洪水神話・犬祖神話や犬を水の精靈と観じる信仰などと結合した穀物起原神話であつて、かなり多岐なる信仰的・儀礼的な背景を伴なう複合伝承であるとみなければならないのである。

#### 四

つぎに、このような伝承の主体をなす犬信仰を中心に少しく補足したい。東亞における犬神話については、松村・松本 W. Koppers・凌純声その他、内外の多くの先学が論及してきたところで、「後漢書」卷一一六南蠻西夷伝その他にみえる槃瓠伝説を中心には、揚子江流域以南の苗瑤系諸族に犬信仰の認められることが指摘されてきた。そして東亞に伝流する穀物起原神話には、鳥がそれをもたらすモチーフ、鼠が天から盗み、あるいは水溜りなどから見出す型や、身体の虱が化して成る型などさまざまであるが、犬がとくに穀物将来の恩人?とされるについては、こうした古くからの犬祖神話と結びついたところにあろうという先学の見解<sup>(41)</sup>は妥当であり、そして犬による穀物将来伝承は水稻栽培文化につよい関わりをもつ

という解釈<sup>(42)</sup>にも、また一つの条件づきで賛同できる。すなわち、穀物が犬の尾によるという要素を伴なう伝承において、このことが一層いえるように思う。しかし、人類の最初の食用植物が犬の、尾以外の他の部分によつて将来されたという伝承では、その植物が麦や瓜であり、それらの伝承社会はチベット・傈僳族のように、水稻耕作が普遍的でなく、山地の焼畑耕作・農牧に依存している社会であることは注意されなければならない点であろう。本来、低栽培民であつた瑤族の伝承でも、犬の中から出てくる穀物は稻米と明示されていない。但し、これらの資料は数的に寡少であり、内容的に簡略にすぎるため、推敲確認は今後に俟つが、とにかく犬の穀物将来説話とこれを支える社会との間に、大略つきのような

A 犬の尾——

稻米

水稻耕作社会

B 犬・尾以外の犬の部分——稻米以外の食用植物——稻作以外の農耕社会

という対応関係が予測されるとともに、この神話伝承の起原についての考察に少しばかりの示唆を与えてくれる。もしそうなら、その起原を論じ、犬の穀物将来伝承として、A・B両型を分別せずに俎上にのぼせることの妥否はおのずから明らかであろう。そしてまた、A・B両型のどちらがより古く、どちらがそのヴァリエーションであるかという問題は、この犬穀物将来説話の発生の問題につながると考えられるのである。従つて、エバーハルト氏が僅かの資料によつて、この伝承の水稻耕作文化的背景やその分布から、これをタイ文化に属するものというような見解を示したのは、やゝ短兵急のうらみがある。大林氏は類似モチーフがアッサムのチベット・ビルマ系諸族にもあるに拘らず、インドシナのタイ系諸族にこれがみられないことを理由に、簡単に賛成しかねるというが、エバーハルト氏説はその結論はとにかく、資料操作・作業手続の上でも十全といえないものがある。

とにかく、寡少な資料による性急な解答は慎しなければならないが、B型が洪水伝説的要素・水と犬との縁故性の稀

薄であるという傾向はある。これをもつて、水稻耕作文化と犬信仰の複合の中にこの伝承の発生を考え、その山地焼畑社会・農牧社会への伝播適応に伴なつて、水の要素が稀薄化し、尾のもつ意味が失われていつたとみることは、一つの推理といふものであろう。もし、そのような仮説に立てば、犬祖神話の顯著とされる瑤族社会に、犬の穀物将来譚や山雀の胃袋より穀粒が将来される伝承のほかに、洪水後、餓えたる人類のため、鳥がつかわされるが失敗し、やがて鼠によつて稻米がもたらされる伝説が報告されているが、<sup>(44)</sup>後者伝承についていえば、雛段灌漑耕作の導入に伴なつて瑤族社会に後次的に伝播した、より後の説話と解釈することも不可ではないであろう。しかし、これら神話伝説は、それを伝承する個々の社会との具体的関連をより実証的に把握されることなしに、瑤族社会を一括して、図式的に解釈を下すことは、しばらく避けなければならない。

この犬の穀物将来説話の主体をなす犬信仰は、犬祖神話を伝える苗・瑤系諸族に顯著であるが、果してこれはそれら諸族に普遍的な信仰であつたろうか。また、逆に、武陵蛮の祖は槃瓠なりという「後漢書」のことによるとたまくなれる記載が、犬祖モチーフの心象的典拠となつて、後世の人々をつよく印象づけてき、ために苗・瑤系諸族以外の犬祖信仰に十分な関心を喚び起させなかつたということは果してなかつたか。こゝで槃瓠神話を論じる余裕をもたないが、たとえば、「魏志」ひく「魏略西戎伝」に、

氐人……其種非一、称槃瓠之後、或号青氐、或号白氐、或号虯氐……

とあり、また、チベット系の僕僕族や麼些族の出自につき、犬が将来した種子が大きく結実した瓜の中から生まれたとい<sup>(45)</sup>、雲南省洱海の白族の天地開闢神話には、洪水後、生き残つた兄妹が結婚し、この夫婦が最初に生んだのが犬の皮袋で、この中から人類が誕生したのであるといふ、そのため、白族は子供が生まれると、犬にかぶせた袋をその新生児にかぶせる

儀礼をとり行うという。<sup>(46)</sup>これは無病息災の呪術でもあるというが、畲族などの槃瓠伝説にかゝわる狗頭冠・犬頭冠を連想せしめるような習俗である。また、黎族にも、人と犬との婚姻譚があり、その起原は問わぬとして、犬祖神話は決して苗・瑤系族特有の神話伝説ではなかつたようにも思われる。とにかく、犬の穀物将来説話の起原はその主体と思われる犬信仰の問題からも十分の検討がなされなければならない。

## 五

しかしながら、犬の穀物将来説話は華南・西南中国に集中的に見出されるというのは確かな傾向である。尤も、「礼記」月令の季秋の月の、天子は犬の肉をもつて、稻の祭りを行うという意味の記載は、犬と稻の間の表象観念を示す、最も古い北中国の記録であるが、これをもつて直ちに犬を穀神的存在と解釈して妥当かどうか。というのは、この「月令」の新嘗の犬は、貴州・水族の伝説では、穀神に対し初穂とともに供献される筈鷄に比較されうるからである。もつとも、筈鷄は稻の所在を告知した存在で、その中に、鳥が穀物をもたらす穀物将来モチーフの痕跡を垣間見られるとすることも出来なくはないから、「月令」の犬からも同様な解釈をひき出しうるかもしだれないが、「月令」の記事から直接に犬＝穀神の関係をひき出せるかどうかは速断の限りではない。

さて、わが国の「亥の子」に因んで語られる犬の登場する穀物将来伝説は、犬を主役とする「花咲爺」の昔話同様に、中國大陸——おそらくは揚子江流域以南——のそれらにつながるものであろう。しかし、わが国には洪水神話・犬祖モチーフは全く稀薄である。穀物将来譚における犬の位置の低いのは、こうした傾向と相関の間に立つのであろうか。また、もたらされる穀物が麦で、稻米であるというものの顯著でないことは、日本に伝入してのちに、稻米から麦に変つたと解

することを困難ならしめる如くにみえるが、大陸での穀物将来伝承の発生とその発展を十分にあとづけ得ぬ今、結論を急ぐことは賢明ではない。いずれにしても、「亥の子」の由来以上に、わが国の犬のかゝわる穀物将来説話は、大陸のそれとの関係が遙かに間接的関係に立つ一つのヴァリエーションとみられるのである。

註

- (1) 柳田国男「年中行事覚書」(筑摩書房「定本柳田国男集」第十三巻 所収)
- 宮本常一「「亥の子行事」刈上祭」(日本民俗学会編 民俗学研究第2輯 昭和二六 所収)
- 西谷勝也「田の神の去來・兵庫県の亥の神祭」(日本民俗学会「日本民俗学会報」第一号 所収)
- 和歌森太郎「年中行事」至文堂 昭三三年
- (2) 宮本常一「前掲論文」七三~七六頁。
- (3) 宮本常一「前掲論文」七二頁。
- (4) 武田明「讃岐佐柳・志々島昔話集」(三省堂 昭一九年)九九~百頁。
- (5) 宮本常一「前掲論文」七二頁。
- (6) 寺島久男「亥の子」(民間伝承の会「民間伝承」九巻八号 所収)
- (7) 大藤時彦「犬飼はずなど」(日本民俗学会「民間伝承」第一三巻一〇号所収)なお、兵庫県鴨庄村と山口県のこの伝承とともに「民間伝承」第五巻二号によるという。(但し、前者は同誌の第二巻五号 西宮市山田隆夫氏報告「亥の子と犬」にあり、
- (8) 民俗学研究所編「綜合日本民俗語彙」第一巻二一〇頁。
- (9) 関敬吾「日本昔話集成・本格昔話3」一二六一頁。
- (10) 大藤時彦「前掲論文」五頁。
- (11) 山田隆夫「亥の子と犬」(前掲報告)二一頁。
- (12) 柳田国男「海上の道」(定本柳田国男集)第一巻一三六頁
- (13) 註の(47)を参照のこと。
- (14) 柳田国男「花咲爺」(定本柳田国男集第六巻「昔話と文学」所収。同「桃太郎の誕生」(前掲集第八巻所収)同「木思石語」(前掲集・第五巻 所収)
- (15) 拙稿「昔話『花咲爺』の祖型—日本と南中国の昔話」(金関丈夫博士還暦記念論文集「日本民族と南方文化」平凡社昭四二年 所収)
- (16) 「民俗週刊」(中山大学語言歴史研究所刊)第四六期三七三八頁、林蘭「相思樹」(神島倉吉訳「芯の赤い人参」(筑摩書房 昭一七年)一九~二三頁。
- (17) 牧野「日本植物図鑑」(改訂版)北隆館 一九五二年 八三八頁。
- (18) 大槻文彦「大言海」によれば、狗尾草の訓をゑ(え)のこ

ぐわ、又は、ゑ(え)のひるぐわむ、狗を飼犬の略として、  
ゑ(え)ぬと訓じてゐる。

(19) 「民間文学」一九六四年 第五期(北京・人民文学出版社)

八二〇頁。

(20) 「文学評論」一九五九年 第六期(北京・人民文学出版社) 六九頁。

(21) 常見純一氏の教示によれば、沖縄の与那国島には、稻穂を

犬の毛・猫の毛に簪える句を含む歌が、旧十一月の「タナンド  
リ」(種取り)と称する種蒔の祭に歌われるといふ。池間栄三・  
新居和盛「与那国島誌」(一九五七年)一八三~一八五頁。

(22) 内田享「犬」(創元社 昭二三年)七一頁。

(23) 「民俗週刊」第八四期 三一~三五頁。林蘭(神島訳)「前  
掲書」一五七~一六九頁。

(24) W. Eberhard ザ “Typen Chinesischer Volksmär-  
chen” の一一〇頁で、四川か?といつてゐるが、その根拠は  
明かではない。

(25) 林蘭(神島訳)「前掲書」一七〇~一七一頁。

(26) W. Eberhard 「前掲書」一一〇~一一一頁。但し、資料

の出所には検討の余地がある。同氏のあげた八例中、重複と思  
われるものが半数はある。

(27) 六月を新穀の月とする農暦は、苗族のものではなかろう  
か。貴州苗族の農暦で六月が狗の月である。十一月のサイクル  
およびそのオーダーは中国式であるが、蛇(巳)より正月がは

じまり、おわりの十二月が龍(辰)である。「民間文学」一九  
六一年第九期所載の「貴州苗族古歌・高杜占地奥和烈底昂采  
少」参照。

(28) 「中華全國風俗志」第四冊 下篇、卷六(大達圖書供應社  
民国二五年 再版) 三〇〇頁。

(29) 趙景深「廣東民間伝説」一四頁(直江広治「中國の民俗  
学」岩崎美術社 昭二一年 一五一頁による)

(30) 「民間文学」一九六三年 第四期 九〇頁。

(31) 宋哲編「雲南民間故事」(上)(香港宏業書局、一九六一  
年)五頁注(1)。

(32) 「民間文学」一九六三年 第四期 九〇頁。

(33) 「民間文学」一九六一年 第五期 一〇六~一〇九頁。

(34) 「前掲書」一〇九頁。注(1)。

(35) 「中華全國風俗志」第四冊 下篇 卷十 四三~四四頁。

(36) 賈芝・孫劍冰編「中國民間故事選」(人民文学出版社 一  
九五九年)一一〇~一一一頁。“Folk-tales from China”,  
Vol. IV. Foreign languages press, Peking. 1958, p. 23  
~45.

(37) 陶雲遜「黎羅蠻三ヤ栗粟族」(國立中央研究院「歷史語言  
研究所集刊」第十七本)四〇一頁。

(38) 「民間文学」一九六四年第四期 九〇頁。

(39) 松本信広「槃瓠伝説の一資料」東洋史集説 昭一六年 所収。

(40) 松村武雄「狗人國伝説の研究」(同著「儀礼及び神話の研究」

- 培風館 昭二三年 所収)
- 松本信広 前掲の「織瓢伝説の一資料」
- 凌純声「古代中国与太平洋区的犬祭」(「民族学研究所集刊」第三回所収) 楊寬「盤古織瓢与犬戎犬封」(「古史辨」第七册所収)
- W.Koppers "Der Hund in der Mythologie der Zirkum-pazifischen Völker" (Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik, Jahrgang I, 1930).
- (41) W. Eerhard 「前掲書」ややも "Lokalkulturen in Alter China" Teil 2. (The Catholic Univ. Peking 1942) p. 203~204.
- 松本信広「稻作の題題」(日本民俗学大系 第11編 平凡社昭三四四年 所収)
- 大林太良「穂落神—日本の穀物起源伝承の一形式について」(「東洋文化研究所紀要」第111号 所収)
- この論文をいへるに当つて、関係資料の教示をし、借覧を許された大藤達次郎氏に感謝する。
- (42) (41) の諸書のほか、直江広治「前掲書」一五二~一五三頁
- (43) 大林太良(前掲書) 一三七~一三八頁。
- (44) 「創世的伝説」(「民間文学」一九六三年 第四期 一四六~一四七頁)
- (45) 陶雲達「前掲論文」四〇一頁。
- (46) 「開天辟地」(李星華編「丘族民間故事伝説集」人民出版社 一九五九年 所収)
- (47) 大林氏の教示によれば、奄美に稻の将来が犬の尾にがつけられて語られる伝承があるといわれ、鎌田久子氏は、大陸系の人々によつて比較的近い時代にわたられたものではなかかると示唆された。
- (48) 大藤時彦氏は「稻作と畑作の行事」(民俗学研究所編「民俗学手帖」古今書院 昭二九年 所収)の中でも、日本では、犬が食用植物の中でも、とくに麦と関係の深いことと注目している。同書六六~六九頁。